

総序

国分寺の研究は、日本の古代仏教を考えるうえで欠くことのできない研究対象として、これまで、文献史学や考古学、さらに建築史学などの分野で重要な位置づけがなされてきた。戦前には、辻善之助による「国分寺考」をはじめとして、国分寺に関わる制度面での研究が文献史学を中心に論究され、さらに諸国国分寺に関する考古学上の成果として、はじめて列島規模で集大成した角田文衛編『国分寺の研究』にその基礎がすえられた。

戦後は、諸国国分寺の実態を網羅した堀井三友著『国分寺址之研究』、国分寺の発掘調査に基づく実態面における成果をもとに、諸国国分寺に関する堂塔の規模や伽藍配置、さらに造営上の規格性などを論じた石田茂著作『東大寺と国分寺』、また文献史学からの総合的研究である井上薫著『奈良朝仏教史の研究』などの多くの先駆的業績があり、著しい進展をみせた。

そうした業績をもとに、1950年代以降、国分寺が所在する教育委員会を中心に多くの国分寺における計画的な発掘調査が実施され、個別国分寺における研究が飛躍的に進展した時期である。さらに、文化財保護法が施行され全国的な文化財保護体制の充実とも相まって、史跡指定や史跡整備などが積極的に行われるようになり、歴史研究の分野のみならず遺跡の保護や活用に関する問題に関心が高まった時代でもあった。昭和の終わりから平成の初めにかけて刊行された角田文衛編『新修国分寺の研究』は、全7巻8冊におよぶ壮大な刊行物になり、国分寺研究における一つの到達点ともいべき詳細な成果が集成された。しかし、本書は、最新の成果が盛り込まれる一方で、約50年前に刊行された『国分寺の研究』時の執筆者をベースに選定されたので、古いデータに基づく国分寺像がかなり含まれている点が惜しまれる。

2011年と2013年に刊行された須田勉・佐藤信編『国分寺の創建—思想・制度—』と同編『国分寺の創建—技

術・組織—』は、前者が研究論文10編と個別国分寺の発掘調査報告5編、後者が研究論文11編、発掘調査報告書が5編の内容で構成されたものである。それまで培われた国分寺に関する多角的な研究論文を主に、『新修国分寺の研究』以降に新たに発掘調査された主要な国分寺遺跡の紹介で構成されたものである。国士舘大学で行われたシンポジウムをベースに、考古学と文献史学における今日までに積み重ねられてきた研究論文を中心とした本書は、各国分寺における儀礼的空間である伽藍地や機能的空間である運営施設の分析、瓦生産を中心とした生産組織の解明、また周辺寺院や官衙との関連、国分寺・国分尼寺の思想、国分寺と法会、国分寺と山林寺院、国分寺と国師など、国分寺研究が新たな局面を迎えるに至った意義は大きい。

国分寺研究にとっていまひとつ重要な課題は、古代律令国家が描いた国分寺構想を実際に造営を担当した在地社会が、どのように受け止め、どの程度実現したのかを実態面から検証・評価することである。国分寺研究の多くは、この点にあるといっても過言ではない。またその造営にあたっては、古代律令国家が全国一律に施工した最大のプロジェクト事業なので、完成した伽藍の構造やそこに至るまでの造営過程の究明は、日本の律令国家の実力や完成度を推量するうえで重要な題材になると思われる。

しかし、実際は、各国分寺とも資料が膨大なるがゆえに、そこから導き出された成果は、個別国分寺研究の段階に留まる場合が多く、列島規模での全体像の評価を視野に入れた総合的研究、たとえば、国分寺の造営という古代日本の国家プロジェクト事業を通し、日本の律令国家をどのように評価するのかといった内容の研究が必要な段階を迎えたといえよう。

そのため、本企画にあたっては、従来一般的に行われ

総序

てきた個別の国分寺研究を対象とする方法をとらないことであった。そのため、第1巻では、総論として、「国分寺研究の成果と課題」「古代寺院建築の遺構」「古代寺院建築の構造」として三つの視点から日本における古代寺院の特徴、国分寺の造営当時における社会的状況からの視点、さらに同一法令に基づく造営事業の受け止め方に対する地域性などに多くのスペースをあてた。また遺構編としては、仏教空間である塔・金堂・講堂・伽藍配置、運営空間である大衆院・菌院・修理院、また国師院・講師院のような施設を遺構ごとに記述し、遺構の規模や構造が国の等級や地域性による共通性や相違点が容易に比較できるように配慮した。

第2巻は出土遺物と瓦窯以外の生産遺跡を対象とした。国分寺の発掘調査で最も情報量が多い出土遺物は、何とんでも瓦である。これには、北陸・山陰地域の豪雪地帯では出土が少ない傾向にあるが、国分寺出土の遺物としては最も普遍的であり、長い研究史があるので、第2巻の中心的課題に据えた。また、仏教関係遺物や金属関係の生産遺跡も各地で新たに増えており、在地社会での技術の高まりも含めて国分寺を理解するうえでの重要遺物として取りあつかった。生産関係に関する国分寺の瓦窯については、分量が多くなるので、須田勉・河野一也編『古代東国の国分寺瓦窯』（高志書院刊）としてすでに別冊として取りあつかった。是非、参考にされたい。

第3巻は、文字瓦・墨書土器・木簡などの出土文字資料、国分寺関係論文の2本立てで構成した。出土文字資料については、各国分寺出土の墨書土器・文字瓦・木簡で構成し、国分寺出土の文字資料が一覧できるよう利便性を考慮した。国分寺関係の研究論文に関しては、『国分寺の創建—思想・制度—』『国分寺の創建—組織・技術—』掲載の研究論文と同一テーマであっても視点を変えてあるので合わせてご利用いただけると幸いである。また、考古学関係者などがそのつど六国史をみなくとも利便が図られるよう配慮して、史料原文、読み下し文に解説を付した国分寺関係史料集成は、別冊として後日に刊行することとした。あわせてご利用いただけましたら幸いです。

なお、本書の各種用語に関しては、典拠となる報告書や論文によって異なるため(例 廻廊/回廊など)、本書では執筆者の判断に委ねて全体での統一をはかることはしなかった。あらかじめご了承下さい。

最後ではあるが、大部の計画である本書の刊行を快くお引受けいただいた高志書院の濱久年氏に、心から感謝の意を表する次第である。

2025年12月30日

須田 勉